

## 第31回スターラヤ・ルッサ国際学会「ドストエフスキーと現代」参加報告記

早稲田大学大学院

博士後期課程

田中沙季

2016年5月21日から24日にかけて、第31回スターラヤ・ルッサ国際学会「ドストエフスキーと現代」(XXXI международные старорусские чтения «Достоевский и современность»)が開催された。スターラヤ・ルッサはフョードル・ドストエフスキーがよく保養に訪れていた小さな田舎町であり、『悪霊』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』等の一部が執筆された土地としても知られている。『カラマーゾフの兄弟』の舞台はこの町であるとも言われており、モスクワから鉄道で8時間弱、サンクトペテルブルグからはバスで6時間もかかるものの、ドストエフスキーの研究者であれば一度は訪れてみたい場所だ。学会の会場にはもともとは作家の別荘であった「ドストエフスキーの家博物館」とその別館が使用された。アクセスの便の悪さゆえに参加者は60人弱と少な目であったが、サンクトペテルブルグのドストエフスキー博物館主催の国際学会「ドストエフスキーと世界文化」と並ぶロシアにおける主要なドストエフスキー学会なだけあって、T.A. カサートキナ氏やB.H. チホミーロフ氏といった著名な研究者も多く参加していた。



ドストエフスキーの家博物館

今回筆者は普段「ドストエフスキイの会」でお世話になっている木下豊房先生からのご

紹介を得て、同じ早稲田大学大学院の泊野竜一氏と共に本学会に参加させていただいた。筆者にとっては初めての国際学会であったが、学会の運営担当者や参加者の方々にあたたかく迎えられ何とか発表を済ませることができた。報告題目は『『罪と罰』における身体の表現：読者としてのポルフィーリイ・ペトローヴィチ（Выражение тела: Порфирий Петрович как читатель в романе «Преступление и наказание»）』で、報告後はフロアから M.M. バフチンの理論との関わりや現実の読者に対するドストエフスキーの態度について質問があり、これらはいずれも筆者にとって今後の研究への大きな励みとなった。



### 筆者の発表

参加者の大半はベテラン研究者だったが、一日目の午後には高校生のためのセッションがあったほか、大学院生の報告者も多かった。発表の内容も多岐にわたり、特に言語学的なアプローチは日本ではあまり見かけない分興味深かった。若手の研究者の報告の中で多かったのは、ドストエフスキーの作品の演劇化やオペラ化、映画化について取り上げた研究であり、最新の研究では狭い意味での「文学」にとらわれないドストエフスキー作品の受容のあり方に関心が向けられているという印象を受けた。個々の参加者と話をしてみると、過去の日本人参加者の近況を尋ねられることが多く、ロシア人研究者のコミュニティーの中で日本のドストエフスキー研究がしっかりと存在感を残してきたことに心強さを覚えた。

学会最終日の5月24日はちょうど「スラヴの文字と文化の日」であったため、通常のプ

プログラムの後に、町中のドストエフスキー像の前で記念式典が執り行われた。式典には地元の中高生たちも参加しており、彼らの真剣なまなざしからはいかにこの作家がスターラヤ・ルッサで尊敬されているか伝わってくるようだった。学会参加者たちがスピーチでロシアの、そして世界の文学・文化を大切にしよう学生たちに呼び掛けており、ドストエフスキー研究界にのみとどまることなく、社会全体に対してもメッセージを発し貢献しようとする本学会の姿勢を目の当たりにすることができた。